

2012年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数					量						
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出 生(ダ)	在庫	加工		
					生	冷	開			塩干	塩蔵	缶詰
23	215.0	209.0	5.3	13.1	12.4	1.0	2.2	1,719	26.6	20.7	15.0	12.8
24	220.0	218.3	0.8	13.0	10.9	0.4	1.8	1,518	33.4			
%	102	104	15	99	88	42	81	88	126	-	-	-

年	価 格				全サンマ				
	産地	東京			輸入	輸出	水揚	価 格	消費支出 生(円)
		生	冷	開					
23	111	439	259	431	145	106	207.8	111	1,240
24	77	411	328	473	179	98	218.3	78	1,091
%	69	94	127	110	123	92	105	70	88

漁業・漁獲の動向と資源

太平洋近海から沖合にかけては日本、ロシア、台湾、韓国ともにほとんどが棒受網により漁獲している。2011年の4カ国の総漁獲量に対する日本の漁獲量の割合は、46%であった。日本の漁獲量は、戦後の棒受網の導入により1950年代から増加した。漁獲量は短い周期で増減を繰り返している。2008年と2009年は30万トンを超えたものの、その後減少して2010年は19.3万トン、2011年は20.8万トンとなった。日本以外では、ロシア、台湾、韓国が棒受網およびそれに準じた漁法で漁獲している。2012年漁期前調査による西経165度～日本の沿岸のサンマ資源量は198.8万トンと推定され、この海域の資源量は2011年より減少した(前年比63.6%)。2012年級の加入尾数は、225億尾で2005年以降では最も低い水準であった。CPUEの変化を見ると、1980年代後半から増加し、1998年に急減した後に2000年から回復傾向を示し、2008年には1980年以降の最高値を示した。その後、2009年および2010年には減少したが、2011年は再度上昇した。2011年漁期のCPUEの水準から資源水準は中位、最近5年間の資源量の推移から資源動向は減少と考えられている。

24年の漁獲量は前年をやや上回り22万トンであった。

本年は震災から1年経ったこともあり、全サンマ登録の隻数は、152隻で前年に比べ7隻増加した。

本年も操業に当たって、各種休漁措置は前年同様実施された。乗組員の休漁のための自主休漁(48時間)、臨時休漁(24時間休漁)、水揚げ回数制限等が実施された。またロシア水域内操業も10月5日(10月6日早朝)で終漁となった。また、氷の供給体制の逼迫等もあって、氷の積み込み数量の制限(トン数階層による制限)措置も講じられた。

本年も前年同様7月8日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日(ロシア水域に入域しない漁船が23日)には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして全国サンマ漁業協会所属の棒受網の20トン未満小型船が8月2日、同20トン以上100トン未満中型船が8月5日、同100トン以上大型船が8月15日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は今年も道東近海で主に流し網の操業であったが、昨年以上に低調で平年を下回る漁であった。大型船が出漁して以降も漁は上向かず、8月下旬まで東経153度周辺まで漁船は出漁していたが、漁況は振るわず前年同様水揚げも少なかった。9月上旬には根室半島南沖～択捉沖合にも漁場が形成され下旬まで継続した。10月上旬になると襟裳岬南東沖合に漁場は南下し、10月下旬には三陸沖まで南下した。11月に入って道東沖漁場は消滅し、三陸沖と常磐沖に漁場は分かれた。11月下旬には主漁場は常磐沖に変わり、12月下旬で終漁となった9月上旬以降10月上旬まで水揚げは前年同期を上回るようになり、中旬以降は下回るようになったが、総水揚げ量は昨年をやや上回った。

本年のオホーツクでの漁獲は817トンであった。（前年：0トン）

魚体長は、本年は大型(29cm)の組成が引続きやや増加し、通算では大型49%（62%）、中・小型51%（38%）で小型化が顕著であった。

魚価は、前年来の輸出の伸び悩み等の影響もあって在庫も多く、水揚げは少なかったものの初漁期の7月は大きいサイズは高かったが総じて魚体は小さく平均価格は安値推移であった。8月以降も水揚げは停滞気味であったが価格の伸びはなく、9月以降は漁獲の伸びとサイズの小ささもあって周年前年を下回る推移となった。また輸出も完全に回復したわけではなく特にロシアへの激減もあって前年並みに留まったこともあり、浜値は77円で前年（111円）を下回り2009年以来の2ケタ台となった。

在 庫 量

本年は4.5万トンと近年では比較的少ない越年在庫から始まった。こうした中、例年最も在庫が少なくなる7、8月に向けて本年も少なくはなったが、本来輸出に向けられる予定の原魚が、福島原発事故の影響が完全に払拭されず、国内に停滞したこともあって消化も鈍かった。そして漁が本格化した9月以降在庫は多くなり、11月には、型も小さくなって鮮魚での消化も少なくなり急増したものの、その頃から大型はなくなり、ミール等で処理されるものも多くなって12月には減少した。結果、越年在庫3.3万トンと前年（4.5万トン）をかなり下回った。

平均在庫量は、輸出の回復の遅れで国内在庫がコンスタントに多かったことを反映し、3.3万トンで前年（2.7万トン）をかなり上回った。

消費地入荷量と価格

24年の東京中央卸売市場の入荷量は、生1.1万トン、冷0.4千トンで前年（生1.2万トン、冷1千トン）を生・冷とも下回った。

本年は、産地で特大サイズが少なく、漁の中盤以降は一層小型化が顕著になったこともあって、昨年をやや下回った。冷凍原魚も前年のような一時的な品薄状況もなく、周年を通じてコンスタントな入荷になったこともあって、前年を大きく下回った。

本年も東京消費地における入荷サイズは、当初から40尾サイズの入荷もみられたが少なく、その後は45尾、50尾主体で推移した。

また、本年の塩干物の入荷は1.8千トンで前年(2.2千トン)を下回った。

本年も東京消費地価格のピークは例年7月にみられる。本年も7月にみられたが、それ以降は、大型サイズが少なかったこともあって、例年極端に下落する10月以降も比較的堅調相場で推移した。

平均価格は生411円(前年：439円)、冷328円(前年：259円)、塩干473円(前年：431円)で、生は出回りの盛期の8、9月の安値が影響し昨年を下回り、冷凍は、震災以降一時的な安値もあったが、総じて原料は高値に転じ、本年もそれを踏襲した格好で推移し前年を上回り、塩干は原料逼迫事情もあって扱いも前年を更に下回り、価格は前年を上回った。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、価格上昇を受け数量、金額とも減少した。

輸 出 入

本年の輸入は、808トンで前年(5,337トン)を大幅に下回った。

昨年は震災後の端境期に在庫喪失により、原料探し状態が続いたことで、一時的に輸入の急増がみられたが、本年はこうした動きもなかったことによるものである。

輸出は平成4年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じた。しかし、昨年来原発事故等による各国の「輸入規制」の影響も完全には回復せず1.3万トンと前年(1.3万トン)並みであった。

価格は、輸入179円(前年：145円)、輸出98円(前年：106円)であった。

輸出国は、ロシアが3番目に落ち、中国がトップの3,650トン、続いてタイが3,006トン、ロシアはかなり落ち2,335トン、続いて韓国、ベトナムとなっている。